

中臣遺跡発掘調査概要

昭和56年度

京 都 市 文 化 観 光 局
財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序

京都市には、現在、判明しているだけで約800か所、5,000ヘクタールにおよぶ埋蔵文化財の包蔵地があります。これは本市の市街地面積25,000ヘクタールの実に5分の1にあたり、京都市民は、まさに歴史の堆積の上に、起居しているといっても過言ではありません。地下に眠る数千年にわたる歴史の実証と、地上で活動する150万市民の日常生活が、紙一重を境に常に対峙しているのが本市の埋蔵文化財のおかれている特徴といえます。

このことは、年間15,000件にものぼる住宅建築や、ビル建設、土地造成等の開発行為のうち、埋蔵文化財に抵触するものが、1,000件から2,000件もあるということ、そしてこの件数に比例して埋蔵文化財も日ならずして、離散消滅していくことを意味しています。

京都市では、この10年来、これら埋蔵文化財について、学者や識者、開発事業者さらには一般市民の理解と協力を後楯に、微力ながらその保護、保存に努めてきました。

ここに著された報告書もその一部として、昭和56年度において国庫補助を受け、実施した調査の成果であります。後世に伝えていく資料として御活用いただければ、これにまさる喜びはありません。

なお、この調査にたずさわっていただいた財団法人京都市埋蔵文化財研究所をはじめ、御協力をいただいた各事業者並びに関係各位に、心からの謝意を表します。

昭和57年3月31日

京都市文化観光局

例 言

- 1 本書は、中臣遺跡昭和56年度文化庁国庫補助事業における発掘調査の概要である。
- 2 発掘調査は、京都市埋蔵文化財調査センターが財団法人京都市埋蔵文化財研究所に委託し、同研究所がこれを実施した。
- 3 発掘調査は4箇所実施した。調査次数は、45次・46次・48次・49次である。

目 次

I 45次調査..... 1	III 48次調査.....12
1 調査経過..... 1	1 調査経過.....12
2 遺構・遺物..... 1	2 遺構・遺物.....12
3 小結..... 2	3 小結.....14
II 46次調査..... 3	IV 49次調査.....15
1 調査経過..... 3	1 調査経過.....15
2 遺構..... 3	2 遺構.....16
3 遺物..... 9	3 遺物.....19
4 小結.....11	4 小結.....20
	V まとめ.....21

図 版 目 次

図版一 遺跡 調査位置図	図版八 遺跡 1 46次I区 全景
図版二 遺跡 中臣遺跡西部主要遺構位置図	2 同II区 全景
図版三 遺跡 46次調査区周辺主要遺構位置図	図版九 遺跡 1 1号住居址 全景
図版四 遺跡 48・49次調査区周辺主要遺構位置図	2 2号住居址 全景
図版五 遺跡 10次・46次調査区平面図	図版十 遺跡 1 3号住居址 全景
図版六 遺跡 航空写真	2 同カマド
図版七 遺跡 45次 全景	図版十一 遺跡 1 4号住居址 全景
	2 同カマド
	図版十二 遺跡 1 S B 1 全景
	2 S B 2 全景

図版五 遺跡	1	48次Ⅰ区 全景		2	同貯蔵穴
	2	SX 1	図版六 遺跡	1	SK 1・2 全景
図版六 遺跡	1	48次Ⅱ区 全景		2	SK 1
	2	竪穴住居址状遺構		3	SK 2
図版七 遺跡	1	49次Ⅰ区 全景	図版六 遺物	1	48次SX 1出土土器
	2	同Ⅱ区 全景		2	49次SK 1出土深鉢
図版八 遺跡	1	1号住居址 全景		3	同SK 2出土深鉢
	2	2・3号住居址 全景	図版七 遺物	46・49次出土土器	
図版九 遺跡	1	4号住居址 全景	図版八 遺物	46次出土土器	

挿 図 目 次

図1 調査位置図	1	図10 出土土器	10
図2 調査区平面図	2	図11 調査区平面図	12
図3 1号住居址	4	図12 SX 1出土土器	13
図4 2号住居址	5	図13 調査区平面図	15
図5 3号住居址	6	図14 1号住居址	16
図6 同カマド	6	図15 2・3号住居址	17
図7 4号住居址	7	図16 4号住居址	18
図8 4号住居址カマド	8	図17 SK 1	19
図9 SK 1	9	図18 出土土器	20

I 45次調査

1 調査経過

今回の調査は住宅建設に先立つ事前調査である。調査地点は山科区勤修寺西金ヶ崎町69番地に所在し、栗栖野丘陵から西南にむかっのびる低位段丘部の末端部付近に位置する。調査対象地は約530㎡あり、ほぼ全面にわたり調査を実施した。当該地周辺の宅地及び、市街化道路部分については昭和51年度以降、7次・12次・18次と発掘調査を実施している。その結果、明確な遺構は検出してないが、古墳時代を中心とした若干の遺物包含層を検出している。今回の調査においても、竪穴住居址等の遺構を検出できる可能性はあまり高くないが、遺物包含層なしは、調査地点が遺跡の中に占める空間的な位置より考えて、水田等の生産に関係する遺構の存在が予想できた。

調査区の基本層序は耕土・床土が約60cmあり、その直下が地山となる。なお、調査区の南隅付近では、床土の直下より暗茶灰色泥土層(SX1)が堆積している。この暗茶灰色泥土層より古墳時代～鎌倉時代の遺物が出土している。

2 遺構・遺物

遺構は平安時代後期～鎌倉時代までに形成されたと考えられる低湿地状遺構(SX1)、近・現代の暗渠排水溝などを検出した。

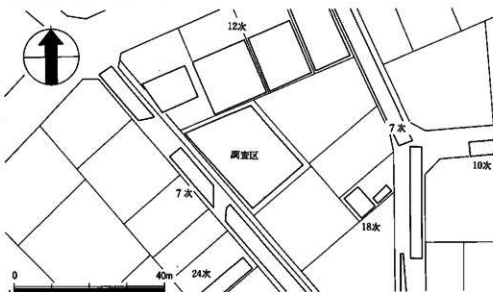


図1 調査位置図

SX1 調査区の南西隅付近から南にむかって調査区外に広がる自然の低湿地状遺構である。堆積土は暗茶灰色泥土層で礫はほとんど含んでいない。検出した北肩部の長さは約14mある。深さは南にむかって次第に深くなり、最深部で検出面より約30cmある。遺物は

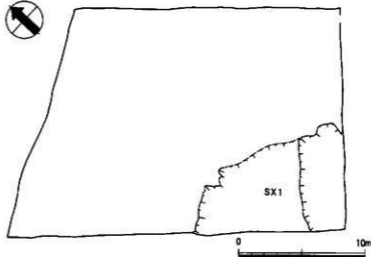


図2 調査区平面図

弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、青磁、白磁、瓦が出土している。

3 小結

調査地点の北西約150m付近（2・3・5・7・35次調査地点を中心とした低位段丘部）及び東南約250m付近（6・10・46次調査地点を中心とした低位段丘部）には、3～4世紀と6～7世紀を中心とした時期の竪穴住居址群及び掘立柱建物群が密集して展開する。（図版二）今回の調査地点は、丁度この両地域の間付近に位置しているが、当該時期の明確な遺構は検出しなかった。検出した遺構としては、平安時代後期～鎌倉時代までに形成されたSX1（低湿地状遺構）のみである。尚、当該地に北接する宅地（12次調査区）及び西接した市街化道路部分（7次調査区）でも同様に遺構は検出していない。このように、当該地を含めた周辺部では、竪穴住居址等は検出されていない。このことから、当該地及び周辺地域は北西住居址群と東南住居址群との間に広がる非居住地帯とみても大きな間違いはないであろう。更に推測すれば、水田等を経営した生産の場とも考えることが可能である。ただし、生産の場と考えるには、生産活動に附随する諸施設、たとえば灌漑施設、畦畔などを確認する必要がある。当該地周辺の当時の姿を復元することが、中臣遺跡の集落の展開を考える上で極めて重要であり、今後の大きな課題として残る。

II 46次調査

1 調査経過

今回の調査は、駐車場建設に先立つ事前調査である。調査地点は山科区勤修寺西金ヶ崎町55・56番地Aに所在し、低位段丘部に位置する。なお、栗栖野丘陵の西南先端部が比高差約3mの崩面となっており、調査区に東接している。

当該地に東接した市街化道路(6次調査)、北接した宅地(10次調査)などで、3～4世紀、6～7世紀の竪穴住居址、8～10世紀の掘立柱建物・井戸・溝等の遺構を多数検出しており、今回の調査でも当該時期の遺構を検出することが予想され、対象地全体を発掘調査した。調査区は東西約45m、南北約10mの範囲である。排土を場内で処理するという制約を受け、調査区を便宜的に東西に2分割し、西側をI区、東側をII区とした。

調査区の基本層序は近年の土地区画整備事業による積土(現耕土)が約50cmあり、次に旧耕土・床土が約40cmある。その直下が地山となる。なお、調査区の西隅より東へ約5mの範囲にわたり、暗茶褐色砂泥層が床土直下より堆積しており、平安時代の遺物を包含している。この暗茶褐色砂泥層は南西に向かって漸次厚く堆積しており、最も厚い南西隅で約16cmある。

2 遺構

遺構は全て地山面で検出した。主な遺構は古墳時代前期の竪穴住居址2・土壇3、古墳時代後期の竪穴住居址2・掘立柱建物2、平安時代の掘立柱建物1・溝1・土壇1がある。その他に古墳時代後期～平安時代のピット多数がある。

1号住居址 調査区の北東隅で検出した。西接する市街化道路部分の調査(6次)及び北接する宅地の調査(10次)の際に検出した竪穴住居址の南東部分にあたる。なお、10次調査区と当調査地との間、約3mの部分については未調査であり、北東側の壁体部の大部分及び主柱穴の状態は不明である。平面形は四隅のコーナーを検出しており、方形を呈すると考えられる。北西—南東間での規模6.15mある。壁溝は未調査部分以外は壁体部に沿って周っており、全周するものとみられる。主柱穴は4箇所にあると考えられるが北東側のものは不明である。北西の壁溝にほぼ接し、中央より若干南側に偏した位置に貯蔵穴が一個所ある。平面形はややいびつな方形で、わずかに2段落ちを呈する。上縁での規模61×73cm、深さ20cmあり、中位での規模40×53cm、深さ18cmある。遺物は床面及び主柱穴と考えられるピットより、甕(図10 9・11)、鉢(同 10)、高杯が出土した。

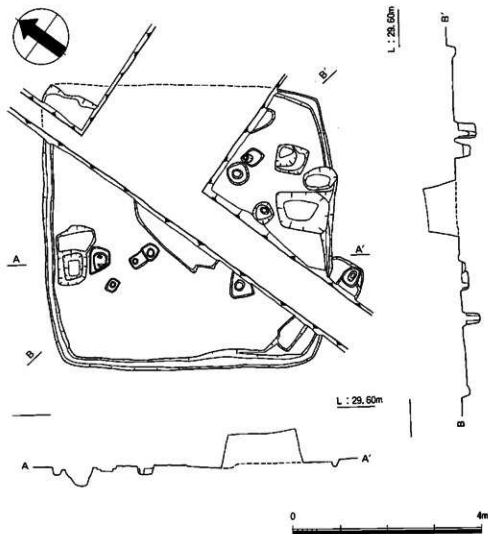


図3 1号住居址

2号住居址 調査区の南西隅付近で検出した。住居址のほぼ南半分は調査区外であり、未調査である。平面形は調査部分の形状よりみて、方形を呈すると考えられる。検出した北東—南西間での規模は5.53mあり、検出面から床面までの深さ約5cmと非常に浅い。壁溝は北西コーナー付近で検出しているが全周するかどうかは不明である。検出した個所で床面からの深さ約2cmある。支柱穴は3箇所検出しているが、本来4箇所あると考えられ、南西の1箇所は調査区外に位置する。柱間隔は北西のものから右廻りで3.25m、2.20mあり、深さは17~47cmある。床面のほぼ中央部とみられる個所に二段落ちを呈するピットが

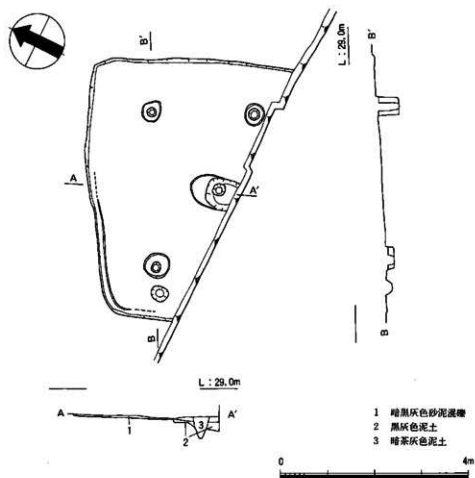


図4 2号住居址

ある。南半分は調査区外にあり、全体の形状は不明である。深さは最深部で27cmある。遺物は床面などから獲、鉢の小片がわずかに出土したのみである。

3号住居址 調査区のはほぼ中央南端で検出した。住居址の大部分は南側の調査区外にあり、全体の形状等は不明であるが、これまでの調査例及び検出部の形状からみて、平面形は方形を呈すると思われる。検出面から床面までの深さ16~20cmある。壁溝は検出した個所では途切れないで周っており、全周しているとみられる。検出個所で幅約20cm、深さ約10cmある。支柱穴と考えられるピットの一部をカマドの南東で1個所検出している。カマドは北壁に付設されており、袖部・焚口部及び煙道部を検出した。規模は80×125cmあり、煙道部検出面から焚口部底までの深さ32cmある。遺物は床面、カマド及び壁溝内より

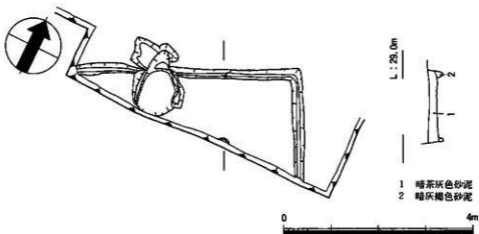


図5 3号住居址

土師器甕(図10 12・13)、高杯、須恵器杯、高杯が出土した。

4号住居址 調査区のほぼ中央北側で検出した。住居址の北東コーナーは調査区外にある。なお、当住居址は同位置でわずかに外側に拡張し、建て替えがおこなわれている。建て替え前を4B号住、後を4A号住とした。平面形はともに方形を呈し、北壁の中央より東に偏した位置にカマドを付設している。住居址の規

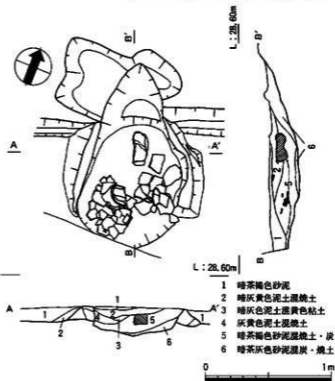


図6 同カマド

横は壁溝の心々で4A住は6.45×6.42m、4B住は6.38×6.36m。4A住の床面は4B住の床面より約5cmほど上であり、貼り床である。検出面からの深さ約10cm、同様に4B住は約15cm。壁溝は、調査した範囲内ではカマド付近で途切れるが、全周していると考えられる。主柱穴は4個所にあり、建て替え後は両側の柱穴は同位置で、北側の2個所はそれ

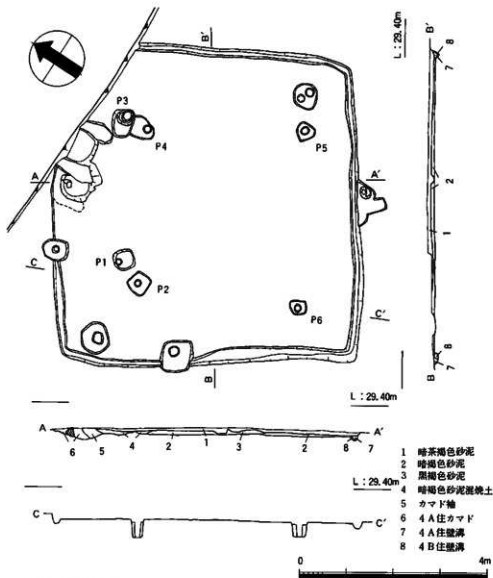
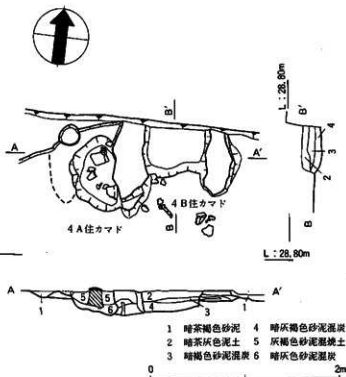


図7 4号住居址

それ北東に位置をずらしている。4 A住の柱穴の深さは37~46cm、4 B住は22~38cmある。4 A住の柱間隔はP 1、3、5、6の右廻りでそれぞれ3.10m、3.75m、3.71m、3.94m。4 B柱はP 2、4、5、6の右廻りで3.26m、3.34m、3.71m、3.45mある。カマドは袖部及び焚口部を検出した。4 A住のカマドは4 B住の左袖の外側裾付近をえぐり取って右側袖部として使用している。4 B住の袖部は黄色粘土を主に用いて築いているが、4 A住の左袖は住居址覆土に類似した黒褐色砂泥を用いている。4 A住カマドの規模は43×80cm、

焚口部の深さは床面より16cm。4 B住カマドは袖肩口部で69cm、床面よりの深さは14cmある。なお、4 B住カマド煙道部は調査区外に位置する。遺物は4 A・B住ともにカマド内、床面等から出土したが、4 B住からは土師器甕、甗、壺、杯、須恵器甕、壺、杯、高杯、匙が一括資料として出土しており、それらを図示した。

(図10 14~24)



SB1 調査区の西南隅

付近で検出した。梁行1間、 図8 4号住居址カマド

桁行2間からなる掘立柱建物である。東側梁行2.24m、同西側2.18m。北側桁行2.42m、同南側3.04m。ピット掘形は円形及び方形で、径42~53cm、深さ22~31cmある。

SB2 調査区中央よりやや西寄りの北端で検出した掘立柱建物である。北接した10次調査の際に、北側梁行、東西桁行の一部を検出している。建物は梁行3間、桁行5間からなるものと考えられる。梁行の長さ3.9m、桁行の長さ8.0mある。なお、北側梁行以外の柱掘形の全てを検出していないため、柱間隔は不明である。柱掘形全てを検出した北側梁行の柱間隔は、等間で1.3mある。

SB3 4号住居址西側で一部重複した位置に検出した。2間×2間の総柱建物で、北側柱列の長さ3.08m、南側3.10m、東側3.20m、西側3.24mあり、東西が若干長い。ピット掘形は方形及び円形で径54~94cm、深さ32~52cmある。

SD1 4号住居址の東側で検出した、北西—東南に延びる溝である。6次及び10次調査区で検出した溝の一部と考えられる。溝の断面形はU字形を呈し、溝底部は平坦である。検出した範囲内で溝底部の傾斜は認められない。堆積土は4層に分層でき、レンズ状に堆積しており、自然に埋没した状態を示している。肩口で幅46~70cm、検出面よりの深さ40~49cmある。なお、溝は丘陵に沿って延長している。

SK1 調査区の西寄り、1号住居址の東側で検出した土坑である。平面形は不整な円形を呈し、大きさは80×81cm、深さ10cmある。堆積土は1層のみで、暗茶褐色砂泥混黄色泥土ブロックである。遺物は坑底より2～6cmほど浮いた状態で出土しており、甕(図10 4～6)、鉢(同 7)、壺(同 3)、高杯(同 8)がある。

SK2 SK1の南側で検出した土坑である。平面形は、北西-南東に長い楕円形を呈し、大きさは73×86cm、深さ13cmある。堆積土は1層のみで暗茶褐色砂泥混炭である。遺物は坑底より10cmほど浮いて、甕、鉢、壺が出土した。

SK3 調査区の東南、SD1の西南で検出した。平面形が東西に長い隅丸方形を呈した土坑である。大きさは52×80cm、深さは42cmある。堆積土は3層に分層でき、レンズ状堆積を示している。上層から、黒灰色砂泥混礫、黒褐色砂泥、茶灰色砂泥である。遺物は壺(図10 1・2)が出土している。

SK4 SB2の東側で検出した土坑である。北接した10次調査区で、土坑の北半分ほどを検出している。平面形は東西に細長い不整長方形を呈し、長径約8.3mある。深さは10次調査で検出した箇所が最も深く33cmある。遺物は平安時代の須恵器甕、杯、土師器皿、甕がある。

SX1 調査区東端で検出した。溝状を呈する落ち込みで、堆積土は1層のみ認められ、黒灰色泥土である。肩口で幅2.44～3.40m、深さ0.1～0.25mで、南に向かって漸次深くなる。

3 遺物

遺物は各遺構及び包含層(暗茶褐色砂泥)から、弥生土器、土師器、須恵器、灰釉、緑釉陶器などが、整理箱で9箱出土した。遺構から出土した主な土器を図示した。

—3～4世紀—

壺(1～3・9) 口縁部が直立する1と外開きする3及び外反する9がある。1・2はハケメ調整し、3は口縁部内面及び肩部外面に粗いヘラミガキを施す。

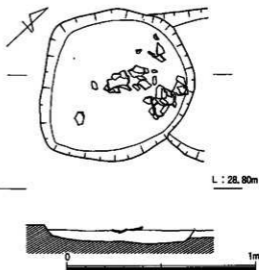


図9 SK1

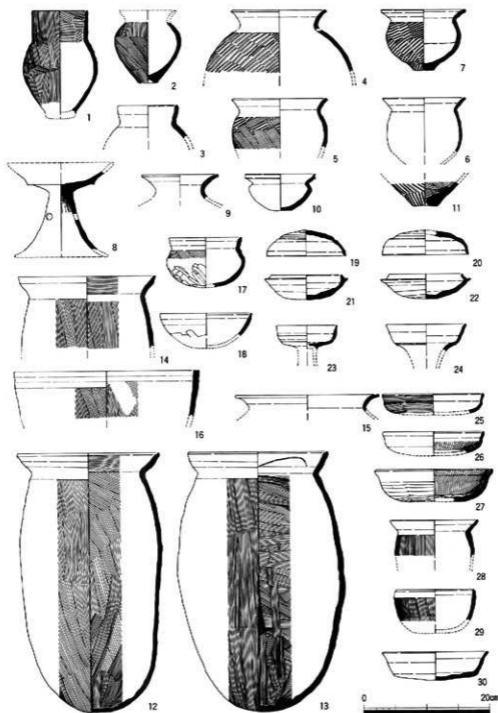


図10 出土土器 1・2：SK3、3～8：SK1、9～11：1号住、12・13：3号住、
14～24：4B号住、25～27：ピット、28～30：SB3

甕(4~6) 肩部の張る4と張りの少ない5・6がある。口縁部はいずれも外反する。4は肩部以下の外面にタタキメを施し、5はタタキメの後にハケメ調整する。

鉢(7・10) 口縁部が外反し、底部がやや突出した平底の7と頸部で強く屈曲し、口縁部が複合口縁状を呈する10がある。10は小形の壺の可能性もある。7は頸部以下の外面にタタキメを施す。10は底部外面を含めて全面に丁寧なヘラミガキを施した後に赤色塗彩する。

甗(11) 底部を焼成前に穿孔したもので、外面はタタキメ、内面はハケメ調整する。

高杯(8) 杯底部と口縁部の境目で屈曲するもので、杯及び脚部外面をヘラミガキする。

— 6~7世紀 —

土師器甕(12~15) 口縁部がやや内湾気味に外反し、端部が匙面を呈する12・13と口縁端部付近でやや角度を変えて立ちあがる14がある。これらは内外面をハケメ調整している。15は口縁部が強く外反し、肩部の張るものである。なお、12~14はいわゆる長胴の甕とされているものである。

同甗(16) 口縁部が外開きするもので、口縁端部付近以下の内外面をハケメ調整する。

同鉢(17) 小形の鉢で、肩部付近をハケメ調整し、底部付近の外面をヘラケズリしている。

同杯(18・27) 椀状を呈する18は底部付近以下をヘラケズリする。27は口縁端部を内方にやや肥厚する。口縁部外面をヘラミガキし、底部内面にはループ状暗文を施している。

同皿(25・26) 口縁端部付近を内方にやや肥厚するもので、26は内面に放射状暗文を施す。

須恵器杯(19~22) 蓋の19・20と身の21・22がある。ロクロ回転はすべて時計廻りである。

同高杯(23) 長脚を呈する脚部に接合する杯部である。

同甗(24) 長い頸部と小さな体部からなる甗の口縁部である。

— 9世紀 —

土師器甕(28) 口縁部が強く外反し、肩部のあまり張らない甕で、外面をハケメ調整する。

同鉢(29) 体部がやや内湾気味に直立する鉢で、外面をハケメ調整する。

須恵器杯(30) 口縁部がやや角度を変えて外反するもので、底部外面は不調整である。

4 小結

今回検出した住居址は当調査区より西及び南方に展開する集落の一部であると考えられる。平安時代のSB3等は、当該地に北接する10次調査区で検出した井戸および掘立柱建物等と関連する遺構であり、平安時代における中臣遺跡のあり方の一端をうかがえる遺構群として評価できる。なお、これまでの調査成果をみると、奈良~平安時代の遺構はそれ以前のものに比べて、小ブロック的に形成されている。

Ⅲ 48次調査

1 調査経過

今回の調査は当該地に住宅建設を予定しており、その建設工事に先立つ事前調査である。調査地点は山科区栲辻番所ヶ口町15番地-3・同17番地-3に所在し、栗栖野丘陵から山科川に移行する低位段丘部に位置する。

当該地周辺の市街化道路及び宅地は昭和51以降、数次に亘り調査を実施している。その結果、縄文時代中期・後期の遺物包含層、弥生時代後期・古墳時代後期～平安時代前期の遺構・遺物を検出している。今回の調査においても、対象地内に当該時期の遺構等が予想された。調査は、対象地が全面に1～1.8m土盛されており、この積土を含めた排土処理を場内で行なうという制約を受け、調査区をⅠ・Ⅱ・Ⅲ区に分割して実施した。Ⅰ区は18.5×15m、Ⅱ区はL字形に設定し、17×6m・14×7m、Ⅲ区は4×3.5m。

調査区の基本層序は積土が1～1.8mあり、耕土・床土が約40cmある。その直下が地山となる。なお、Ⅰ・Ⅲ区では縄文時代後期を主体とする低湿地状の溜り(SX1：黒褐色砂泥混礫)を床土の直下で検出しており、この溜りを縄文時代の遺物包含層として考えている。

2 遺構・遺物

遺構は黒褐色砂泥混礫層及び地山面で検出した。検出した主な遺構は竪穴住居址遺構1・溝2・低湿地状遺構1・ピットである。これらの遺構の時期は、出土した遺物より、縄文時代後期、古墳時代前期、平安時代である。遺物は縄文土器、土師器、須恵器などが整理箱で2箱出土した。

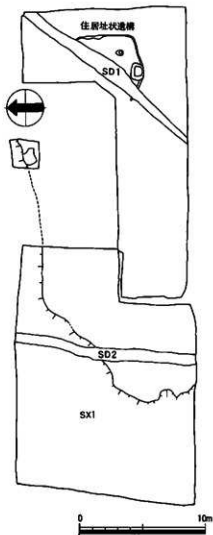


図11 調査区平面図

SX1 I区及びIII区で検出した低湿地状遺構である。南・東屑を検出し、北・西屑は調査区外にある。堆積土は1層のみ認められ、黒褐色砂泥混硬である。深さは検出面より20~27cm。出土した遺物は縄文土器(図12)、石楨片1がある。

竪穴住居址状遺構 II区の東部で検出した。溝、ピット及び貯蔵穴状土坑からなる遺構である。これは竪穴住居址の床面より上部が後世に削平され床面下に構築された施設の一部が残存した状態であると考えられるが、支柱穴とみられるピットは南東の一個所のみである。溝の幅8~24cm、深さ2cm。ピットの径42×61cm、深さ12cm。貯蔵穴状土坑は二段落ちを呈する方形土坑で、上縁での規模は103×135cm、深さ4cm、土坑底まで23cmある。出土した遺物は3~4世紀の斐小片が数片ある。

SD1 II区で検出した南東一北西に延びる溝で、16・21次調査の際に検出した溝の一

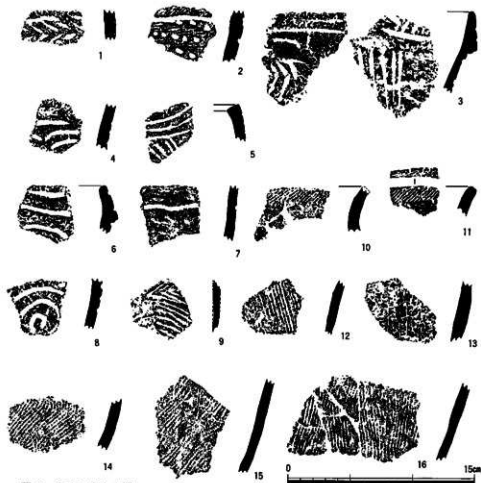


図12 SX1出土土器

部と考えられる。溝の断面形は溝底がやや丸味のある逆台形を呈し、溝底は北東に向かって下っている(高低差約15cm)。堆積土は2層に分層でき、レンズ状堆積を示している。肩口で幅41～141cm、検出面よりの深さ12～27cm。出土した遺物は布留式併行の甕、高杯がある。

SD2 I区で検出した、ほぼ南北に延びる溝である。溝の断面形は船底形を呈し、溝底は北に向かって下っている(高低差約15cm)。堆積土は2～3層に分層できるが、レンズ状堆積を示している。肩口で幅76～98cm、検出面よりの深さ10～22cm。出土した遺物は平安時代の土師器皿がある。

出土した遺物は、縄文土器、土師器、須恵器があるが、SX1より出土した縄文土器が比較的良好な資料として得られており図示した(図12)。縄文土器を概観すると、文様の構成にはヘラ刻み(1)、縄文を施した後に、沈線文と刺突文(2)、沈線文のみ(3・5・7・9)、磨消縄文と沈線文(6・8)、縄文のみ(10・11・14～16)、条線のみ(12・13)がある。なお、縄文のみとしたなかで、10・11は口縁部内面及び端部(11)に縄文を施文している。

3 小結

縄文時代に形成されたSX1は、昨年度山科川右岸を調査(42次調査)した際に検出した、低湿地状遺構の上部的な位置にあたる。また当調査区に、東接する市街化道路の調査に際して(10次調査)、最北端のトレンチで、今回検出したSX1の延長と考えられる南肩部を検出している。なお、SX1は栗栖野丘陵が低位段丘部に移行した地点に形成されており、当遺構から出土した縄文土器は丘陵部から流下して、埋没したとも考えられる。

現在まで、山科川と栗栖野丘陵にはさまれた低位段丘部における調査では、縄文時代中期～晩期の遺物包含層、自然に形成された低湿地状を呈する遺構および後期の埋没(49次調査)は検出しているが、竪穴住居址等は未発見の状態である。また、栗栖野丘陵東側部については一部の地点(19次調査：トレンチ調査)で調査を実施したのみであり、当該時期の様相は不明である。このように付近一帯における縄文時代中期～晩期の集落および墓域などの展開を知る上で、手掛かりとなる遺構はほとんど未発見の状態といえ、竪穴住居址等の発見がまたれる。また、付近一帯における当該時期の様相の解明が今後の大きな課題として残る。

VI 49次調査

1 調査経過

今回の調査は住宅建設に先立つ事前調査である。調査地点は山科区柳辻番所ヶ口町21番地2・3に所在する。山科川と栗栖野丘陵にはさまれた低位段丘部に位置し、山科川まで約60mの地点にある。調査区に北接した市街化道路は昭和53年度（16次調査）に調査している。その調査の際に6～7世紀の竪穴住居址、掘立柱建物、溝等を多数検出している。今回の調査においても竪穴住居址等の遺構を検出することが予想された。

調査対象地内には調査を着手する以前に、擁壁が東西・南北方向に各一個所ずつ設けられており、更に約1.8mの厚さで土盛されていた。これらの積土を含めた排土を場内で処理するという、かなり制約された条件のなかで調査を

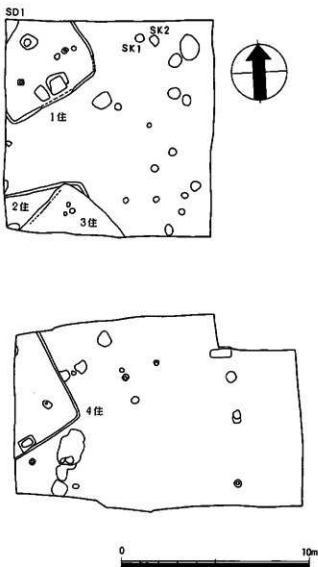


図13 調査区平面図

実施した。調査対象地の面積は約570㎡あるが、調査区は東西方向の擁壁を境に南北で分け、I・II区とした。I区を12×11m、II区を16×11m・9×5mの範囲とした。

基本層序はI・II区ともに積土が約1.8mあり、耕土および床土が0.2～0.3mで、床土の直下が地山である。遺物包含層は水田耕作時にすべて削平されており検出していない。

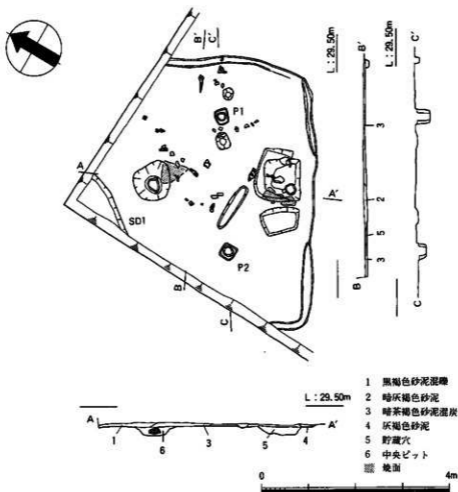


図14 1号住居址

2 遺構

遺構はすべて地山面で検出した。主な遺構は縄文時代後期の埋裏2、古墳時代前期の竪穴住居址4、同後期の溝1がある。その他に土坑状落ち込み、ビットなどがある。

1号住居址 I区の北西隅付近で検出した。住居址のほぼ北西半分は調査区外にある。平面形は調査部分の形状からみて、方形を呈すると考えられる。南側の東西両コーナー付近での規模は5.52mある。検出面から床面までの深さ約5cmと非常に浅い。壁溝は南壁中央部で途切れるが、全周していると考えられ、幅約16cm、床面よりの深さ5cmある。主柱穴は2箇所検出しており、P1-P2間で3.08mある。床面のほぼ中央と考えられる個所に不整な円形を呈するビットが1箇所あり床面で76×78cm、深さ18cmある。なおビット中

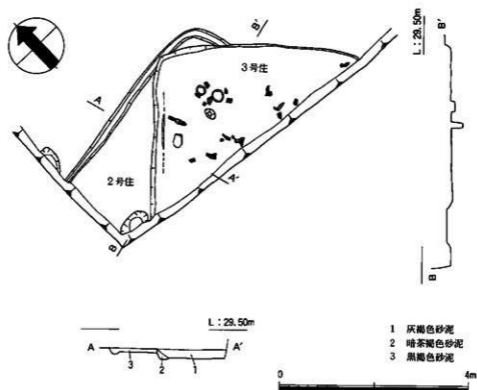


図15 2・3号住居址

中央部に、底部より若干浮いた状態で約30cm大の石を検出した。貯蔵穴と考えられる方形ピットを南壁中央部より約20cmほど内側で検出した。床面での規模77×90cm、深さ16cmある。床面に炭化材及び焼面が認められ、焼失住居である。なお、当住居址は北西の一部がSD 1に削られている。遺物は床面および貯蔵穴から甕、壺、高杯、鉢(図18 3～6)が出土した。

2号住居址 I区の南西隅付近で検出した。当住居址の大部分は調査区外に位置する。検出したのは北壁および北東コーナー付近の一部である。検出面から床面までの深さは約8cmほどある。検出した範囲内で壁溝は壁体部に沿っており、本来全周していたと考えられる。幅12～20cm、床面からの深さ5cmある。なお、当住居址の東南部は3号住居址によって削り取られている。遺物は甕(図18 7)などが出土している。

3号住居址 2号住東南部と重複した位置で検出した。住居址の東・南部は東西方向の擁壁の下にあり、未調査である。平面形は方形を呈すると考えられ、検出面から床面までの深さ約20cmある。壁溝は北西の一部で検出しているが全周するかどうかは不明である。

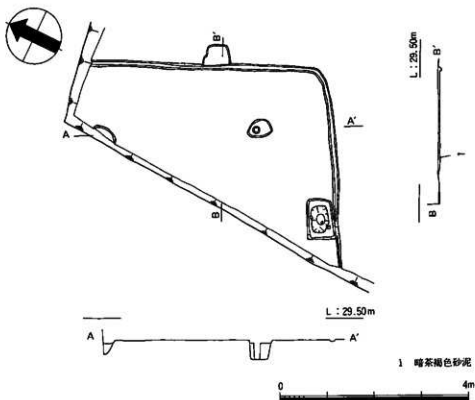


図16 4号住居址

検出した個所で幅20cm、床面からの深さ4cmある。なお、2号住と重複した位置にある床面は、2号住床面を約10cmほど掘り下げている。床面で炭化材を検出しており焼失住居である。遺物は甕、壺、高杯(図18 8・9)が出土している。

4号住居址 II区の北西隅付近で検出した。住居址の大半が調査区外および東西方向の擁壁下であり、その部分については未調査である。検出した壁体部の形状から、平面形は方形を呈すると考えられる。検出面から床面までの深さ0~3cmと極端に浅く、上部が削平されている。壁溝は検出した範囲内で一周しており、全周すると考えられる。幅12~14cm、床面からの深さ4cmある。主柱穴は2個所で検出しており、主柱穴間の距離約3.2mある。貯蔵穴と考えられる、二段落ちを呈する方形ピットを南壁の中央付近で、壁溝と接した位置に検出した。ピット上縁で56×84cm、深さ8cm。ピット底まで26cmある。出土した遺物は甕、器台などの小片がある。

SK1 1号住居址の東側で検出した埋甕である。掘形は円形を呈し検出面で44×48cm、

深さ23cmある。埋嚢は掘形のほぼ中央部に、底部を下にして埋めている。なお、埋嚢は深鉢形土器(図18 1)の底部を打ち欠いた状態で使用している。

SK2 SK1の東側で検出した埋嚢である。掘形は不整な方形を呈し、検出面で42×55cm、深さ20cmある。埋嚢は掘形内で散乱した状態で検出したが、深鉢形土器(図18 2)の底部を穿孔して使用している。

SD1 I区の北東隅で検出した溝で、16次調査の際に検出した溝の延長部にあたる。検出したのは東肩部のみで、検出面からの深さ22cmある。なお、1号住居址床面を掘り込んでいる。

3 遺物

遺物は遺構から主に縄文土器、土師器、須恵器などが、整理箱で4箱出土した。遺構から出土した主な土器を図示した。

縄文土器深鉢(1・2)体部中央付近でやや膨らみ、わずかに外反する口縁部にいたる1と、頸部でくびれる2がある。1・2の内外面には条痕が残る。なお、2の底部中央には焼成後に穿孔が行なわれ、また1・2ともに外面に煤が付着しており、日常使用のものを埋嚢に転用したものである。

土師器壺(3・4・9)3は球形を呈する体部と角度を変えて立ちあがる口縁部からなる。外面の肩部および底部付近、内面の体部下半をハケメ調整する。4は複合口縁を呈し、内外面を丁寧にヘラミガキする。9は頸部がくびれ、口縁部が外反する小形の丸底壺である。同襲(7・8)7は口縁部がつよく外反し、端部がわずかに立ちあがるもので、口縁部の内面をハケメ調整する。胎土の特徴より搬入品である。8は口縁部が外反し、端部が内方に肥厚する。

同高杯(5・6)杯部の中ほどで段をもつ5と杯部が碗状を呈する6がある。5・6は内外面をヘラミガキする。

須恵器杯蓋(10)口縁部と天井部の境界付近から上部を時計廻りでヘラケズリする。

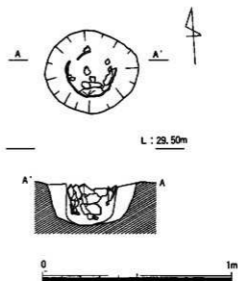


図17 SK1

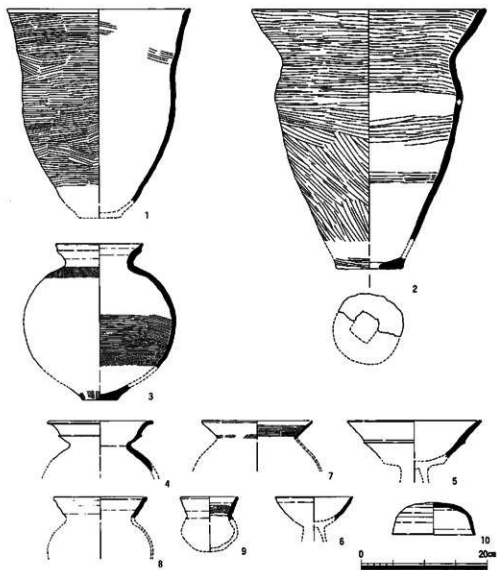


図18 出土土器 1：SK1、2：SK2、3～6：1号住、7：2号住、8・9：3号住、10：SD1

4 小結

今回の調査で検出した縄文時代後期の埋蔵は、当該時期における遺構としては中臣遺跡で初めて検出したものである。古墳時代前期の竪穴住居址を4戸検出したが、3号住居址は出土遺物からみて布留式（新）併行と考えられる。これまで中臣遺跡では布留式併行の住居址は、6次調査区で1戸のみが調査されているだけであり、中臣遺跡の3～5世紀の集落のあり方を考える上で貴重な資料と言えよう。

V ま と め

本年度に調査を実施した個所は45次、46次、48次、49次調査地点の計4個所である。この4個所について調査を実施して得た成果は、主な遺構として縄文時代後期の埋窆2、古墳時代前期の竪穴住居址6・竪穴住居址状遺構1・溝1・土壇3、古墳時代後期の竪穴住居址2・掘立柱建物2・溝1、平安時代の掘立総柱建物1・溝2・土壇1などがある。その他に縄文時代後期を主体とした低湿地状遺構(遺物包含層)、ピットなど多数がある。これらの遺構および遺物包含層などから、縄文時代および弥生時代後期から中世(その間に若干の空白期間はあるが)にいたるまでの遺物が出土した。出土した遺物は中臣遺跡が存続した各時代、時期における様相を反映している。

山科川に面した低位段丘部では、これまでに縄文時代中期～晩期の遺物包含層(21次調査地点など)および晩期の埋窆(23次調査地点)を検出しているが、後期の遺構は不明であった。本年度、49次調査地点で検出した後期の埋窆はこの空白部分を埋める資料であるとともに、周辺に遺物包含層が分布している事実と考え合せると、当時の様相を復元する上で極めて重要な位置にあると言えよう。また低位段丘部におけるこのようなあり方からみて、栗栖野丘陵の東側部に竪穴住居址等が予想され、丘陵部分を含めた一帯は、中臣遺跡における縄文時代の様相を明らかにする上で鍵となる地域であると言えよう。

中臣遺跡における竪穴住居址群(集落)が存続した時期は、これまでの調査成果により、3～5世紀前半頃と6～7世紀中頃に分かれる。3～5世紀に形成された集落の廃絶時期を、従来は6次調査地点で検出した、布留式(古)に併行する竪穴住居址の頃とされていた。本年度、49次調査地点で検出した3号住居址は布留式(新)に併行すると考えられ、少なくとも当該時期まで集落は存続したと言えるが、その廃絶時期を予測させ得る資料でもある。なお、布留式期の竪穴住居址は前記2個所が確認されているのみであり、その様相については不明と言ってもよく、今後に残された課題である。

46次調査地点で検出した平安時代の掘立総柱建物は倉庫と考えられ、北接した10次調査地点の井戸および掘立柱建物(図版五)などとセットになる遺構であろう。なお当該地周辺の雑地などが未調査のため、全体としてどのような構成・輪郭をもつのかは不明である。^(註1)

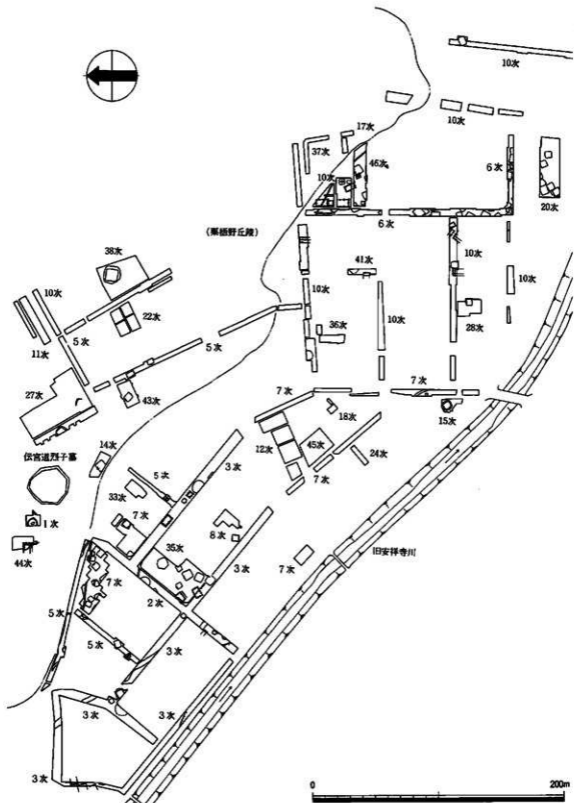
(註1) 中臣遺跡ではこれまで、中世の村落に関する遺構は未発見であるが、中世の遺物が耕土などから出土しており、当該期の村落が存在したことは確実である。平安時代村落の構造(「家地」の形成等)の変容を通して、中世村落のあり方を探る必要があらう。

平安学園、萩本勝氏より御教示を得た。

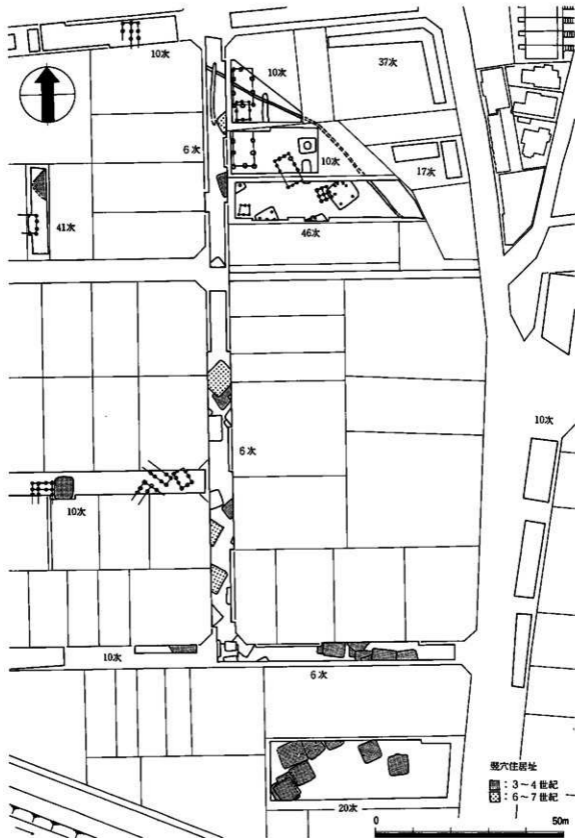
圖 版



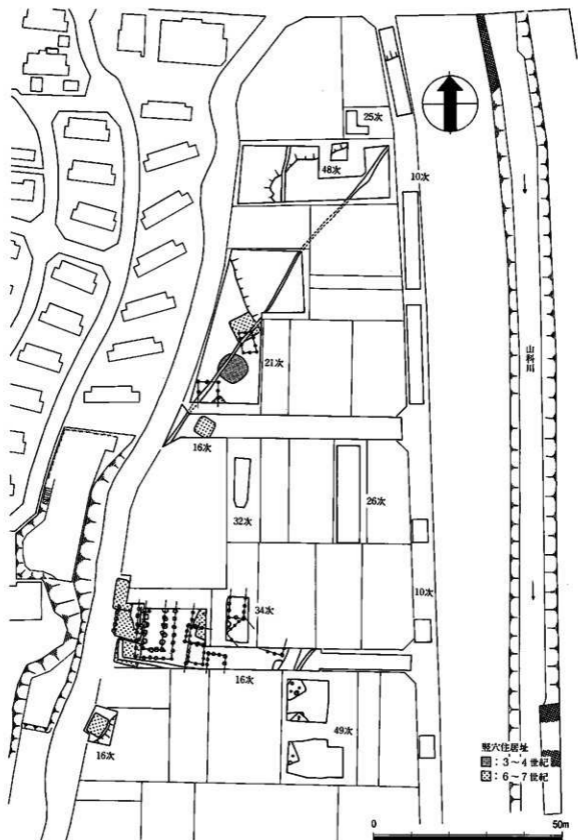
調査位置図



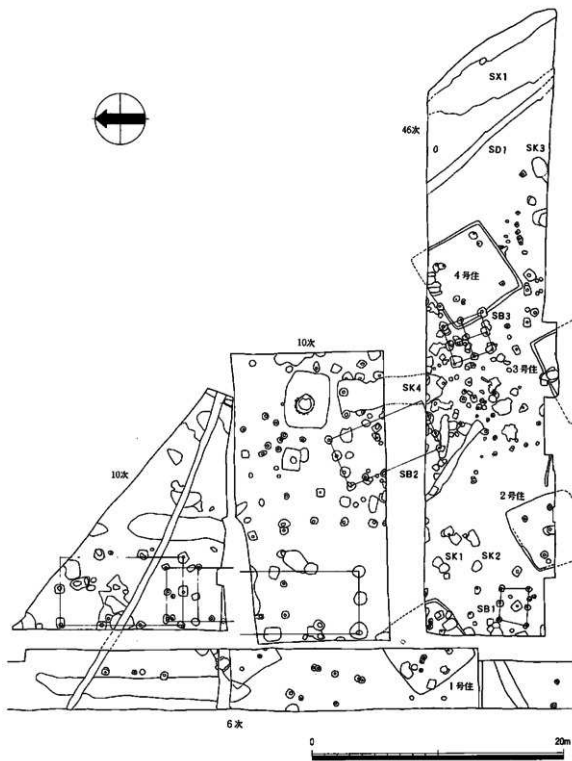
中臣遺跡西部主要遺構位置圖



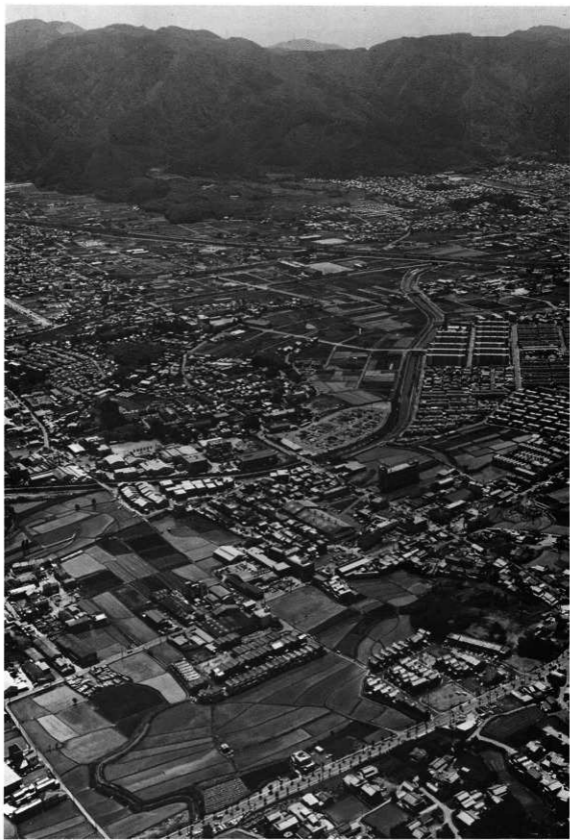
46次調査区周辺主要遺構位置図



48・49次調査区周辺主要遺構位置図



10次・46次調査区平面図



航空写真



45次全景



1 46次 I区全景



2 同II区全景



1 1号住居址全景



2 2号住居址全景



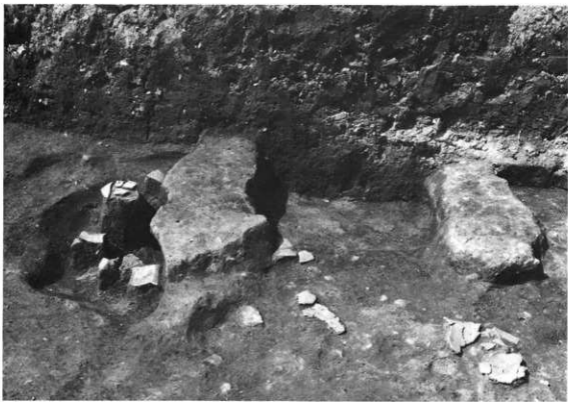
1 3号住居址全景



2 同カマド



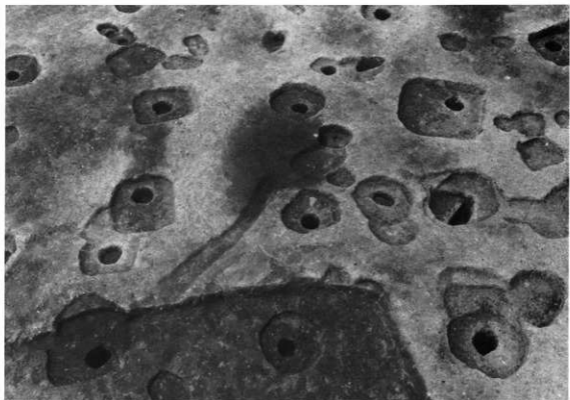
1 4号住居址全景



2 同カマド



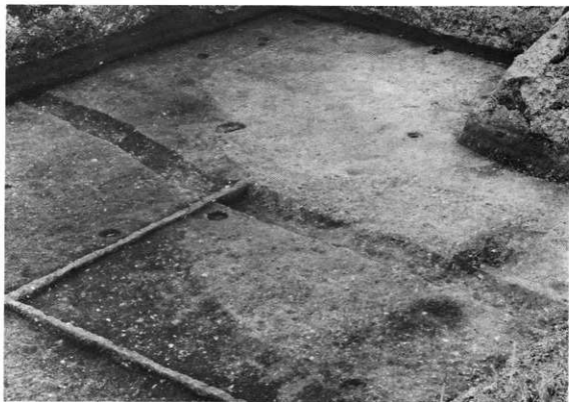
1 SB1全景



2 SB3全景



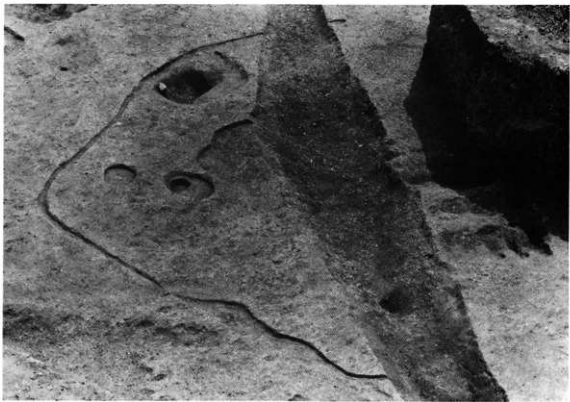
1 48次I区全景



2 SX1



1 48次Ⅱ区全景



2 竖穴住居址状遺構



1 49次I区全景



2 同II区全景



1 1号住居址全景



2 2・3号住居址全景



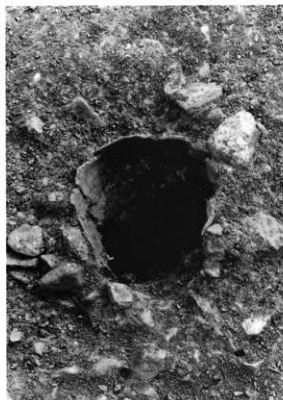
1 4号住居址全景



2 同貯藏穴



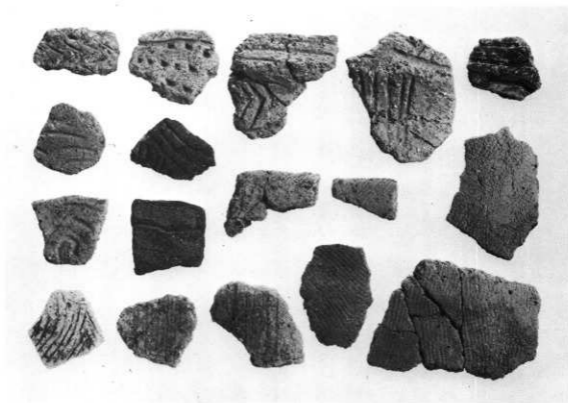
1 SK1・2全景



2 SK1



3 SK2



1 48次S X 1出土土器



2 49次S K 1出土深鉢



3 同S K 2出土深鉢





中臣遺跡発掘調査概要

昭和56年度

発行日 昭和57年3月31日

発行 京都市文化観光局

住所 京都市左京区岡崎最勝寺町13番地
京都会館内

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川大宮東入ル元伊佐町
TEL (075) 415-0521

印刷 真 陽 社